

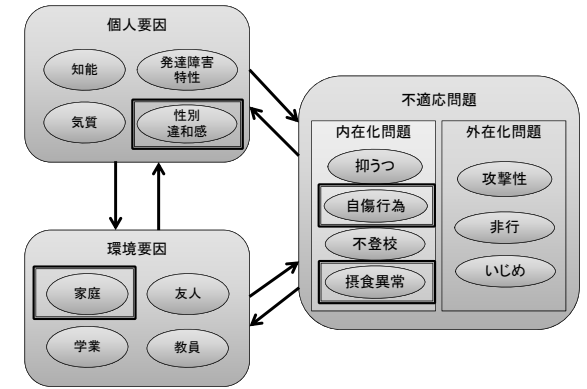
児童・青年の発達とメンタルヘルス に関する大規模縦断研究

性別違和感, 社会経済的地位,
摂食行動異常, 自傷行為の観点から

企画主旨

- ▶ 児童・青年の発達とメンタルヘルスをめぐる状況
 - 性的少数者(LGBT)への認識の高まり
 - 社会経済的格差の拡大
 - 食行動異常、自傷行為など不適応問題の多様化

- ▶ コホート研究(縦断研究)の重要性
 - 個人要因と環境要因の複雑な相互作用(transaction&interaction)の解明
 - 国内の研究の不足
 - ・ 文化的風土の影響や個人情報保護の流れ



今日の内容

▶ 話題提供

- 対人関係困難を媒介とした性別違和感と非行等の行動との関連(名古屋学芸大学 浜田 恵)
- 間接的指標による社会経済的地位の測定および子どもの発達・適応との関連の検証(中部大学 伊藤大幸)
- 一般小中学生における情動調整方略と食行動異常の関連(神戸学院大学 村山恭朗)
- 小中学生の自傷行為と内在化問題, 対人関係問題との関連(愛知東邦大学 高柳伸哉)

▶ 指定討論

- 中部大学 三島浩路 教授

第61回教育心理学会自主シンポジウム話題提供 2019.9.15

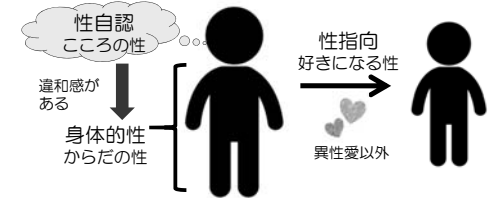
対人関係困難を媒介とした 性別違和感と非行等の行動との関連

名古屋学芸大学ヒューマンケア学部
浜田 恵



性別違和感

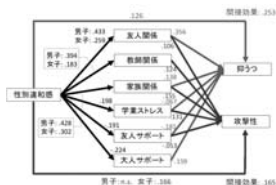
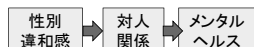
性別違和(Gender Dysphoria)
個人が経験している性(性自認)と割り当てられた性(身体的性)の不一致と、それによる苦痛によって特徴づけられる診断名



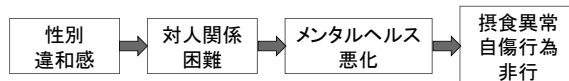
性別違和感: 経験している性(性自認)が割り当てられた性(身体的性)と異なる、という感覚のこと

性別違和感との関連として考えられること

- 横断調査の結果(浜田、2016 第27回発達心理学会)

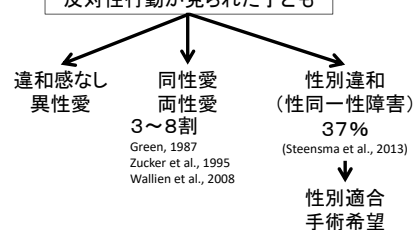


- 性別違和感を示す人など、社会においてマイノリティに位置づけられる人は偏見や差別を受ける状況に置かれやすいため、心理社会的問題を体験する頻度が高い(Meyer, 2003)。



子どもの性別違和感の特徴

幼児期に性別違和感の主張や
反対性行動が見られた子ども



- 子どもの性別違和感は成長につれて6割が消失(Wallien et al., 2008) → 性別違和感の継続する者と一時的なものを分けて考える必要がある

対象者

- 一般群: 2014~18年度のデータを分析
小6~中3のデータが揃っている2つの学年コホート

小学校 入学年度	男子	女子	合計
2009	432	364	796
2010	342	380	722
合計	774	744	1518

調査内容

性別違和感尺度 短縮版

- 友人問題 (SDQより) 5項目
- 教師関係
- 家族関係

- 抑うつ: DSR5-C短縮版 9項目3件法
- 攻撃性: HAQ-C短縮版

食行動異常

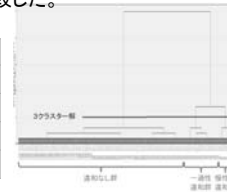
- やせ願望・体型不満
- 過食
- 自傷行為: この1年の経験の有無 (刃物などで身体を傷つける)
- 非行: この1年の経験の有無 (喫煙・学校をさぼる・飲酒・ナイフ持ち歩き・脅して金品をもらう・校則を破る・お金の持ち出し・ネット上で知らない人と交流)

- 性別違和感尺度項目
- 自分が今の性(男子/女子)であることがいやだと思う。
 - 自分はまちがった性別に生まれてきたのではないかと思う。
 - 自分の今のからだをいやだと感じる。
 - 同性の友達が好きでそのような遊びや活動に加わりたくないと思う。
 - 自分のことを男子だと思う。
 - 自分のことを女子だと思う。
 - 自分が男子なのか女子なのか、わからないと思うことがある。
 - 今の自分のからだを大人として成長していくことをいやだと感じる。

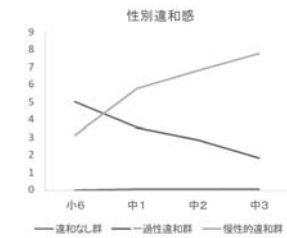
性別違和感尺度による群分け

- 小6～中3の性別違和感の尺度得点をもとに階層的クラスタ分析 (Ward法) を行い、デンドログラムに基づいて3クラスター解を採用
4年間、顕著な違和感を示さない群 → 違和感なし群
一時的な違和感を示すが次第に下がる群 → 一過性違和群
継続して違和感があり、次第に上がる群 → 慢性的違和群
- 3群別に対人関係・メンタルヘルス・食行動異常の得点の推移、自傷行為・非行の経験率の推移を比較した。

	男子	女子	合計	割合
違和感なし群	686	514	1200	79%
一過性違和群	75	150	225	15%
慢性的違和群	13	80	93	6%
合計	774	744	1518	100%

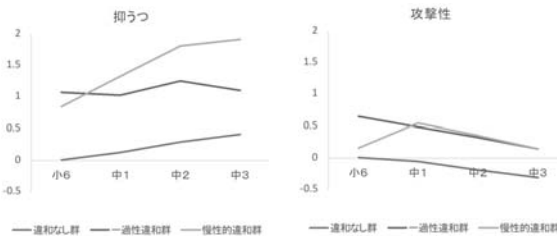


結果: 性別違和感の軌跡



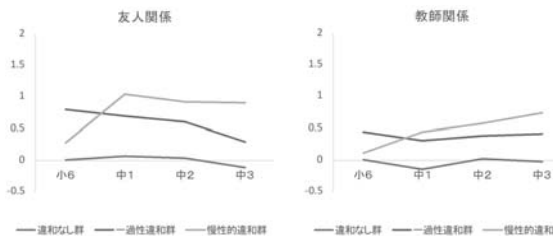
- 小6時点では、一過性違和群の方が性別違和感がやや高い。

結果: 抑うつ、攻撃性



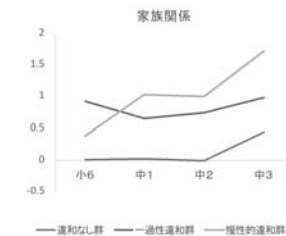
- 抑うつ: 違和感なし群、慢性的違和群は増加、一過性違和群は維持。一過性違和群では違和感の下がっているが、抑うつは維持傾向。
- 攻撃性: いずれの群も減少、慢性的違和群と一過性違和群でほとんど差はない。性別違和感の高低とは関連しない?

結果: 対人関係



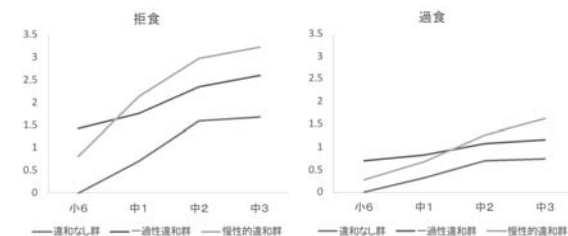
- 友人関係: 違和感なし群・一過性違和群では漸減、慢性的違和群では小6から中1にかけて増加し、その後維持 (違和感なし群とは1SD程度の差)
- 教師関係: 違和感なし群・一過性違和群では維持 (一過性違和群の方が0.5SD程度高い)、慢性的違和群では増加

結果: 対人関係



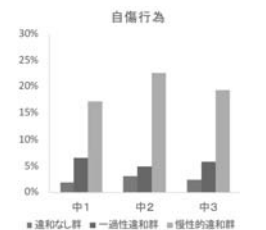
- 対人関係の中では最も差が顕著
- 違和感なし群と慢性的違和群で1.3SD程度の差 (中3)
- 対人関係はいずれも、性別違和感の得点の軌跡と符合する

結果: 食行動異常



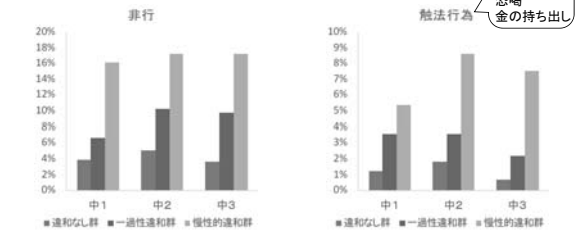
- 拒食、過食ともに全体的に学年が上がるごとに増加
- 拒食: 中1以降は、違和感なし群と慢性的違和群で1.5SD程度の差
- 過食: 学年が上がるごとに、違和感なし群と慢性的違和群で差が広がる

結果: 自傷行為



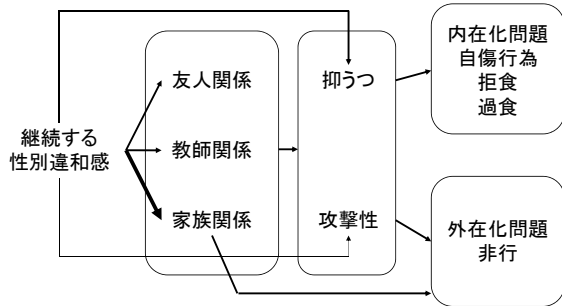
- 違和感なし群と比較すると、慢性的違和群は7～9倍のリスク (5人に1人)
- 先行研究との比較
 - 国内の成人医療機関受診者 31.0% (中塚・江見, 2004)
 - イギリスの支援機関受診者 (平均14歳) 39% (Holt et al., 2014)

結果: 非行



- 非行: 違和感なし群と慢性的違和群で4倍の差
- 触法行為: 違和感なし群と慢性的違和群では、中1・2で4倍、中3で11倍の差
- 攻撃性よりも差が顕著 → 攻撃性の高さが非行につながる通常のパターンとは別物

考察: 継続する性別違和感と対人関係、メンタルヘルス、心理社会的不適応の関連の仮説

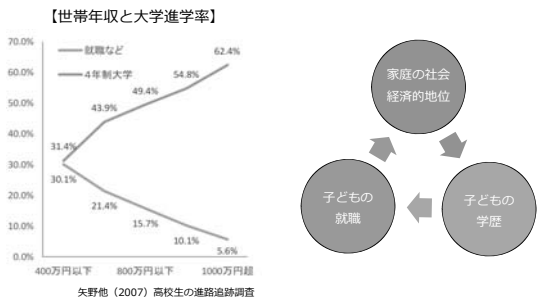


中部大学 伊藤大幸

間接的指標による社会経済的地位の測定および子どもの発達・適応との関連の検証

問題

◆ 社会経済的格差と教育格差



問題

◆ 国内の研究 (お茶の水女子大学, 2018)

	小6							
	国語A		国語B		算数A		算数B	
	平均 正答率	(変動係数)	平均 正答率	(変動係数)	平均 正答率	(変動係数)	平均 正答率	(変動係数)
Lowest SES	68.00	(0.30)	48.44	(0.51)	69.68	(0.33)	36.29	(0.60)
Lower middle SES	72.69	(0.26)	54.45	(0.43)	76.21	(0.27)	42.29	(0.52)
Upper middle SES	76.59	(0.22)	59.68	(0.38)	81.00	(0.23)	47.68	(0.47)
Highest SES	81.99	(0.18)	67.36	(0.32)	87.58	(0.17)	57.69	(0.41)
合計	74.79	(0.25)	57.44	(0.42)	78.58	(0.26)	45.94	(0.52)

	中3							
	国語A		国語B		数学A		数学B	
	平均 正答率	(変動係数)	平均 正答率	(変動係数)	平均 正答率	(変動係数)	平均 正答率	(変動係数)
Lowest SES	70.43	(0.28)	63.14	(0.43)	52.84	(0.45)	38.78	(0.50)
Lower middle SES	75.56	(0.23)	69.96	(0.35)	61.45	(0.37)	44.90	(0.45)
Upper middle SES	78.94	(0.21)	74.26	(0.31)	67.40	(0.31)	49.66	(0.41)
Highest SES	84.76	(0.16)	81.39	(0.25)	77.08	(0.24)	58.90	(0.35)
合計	77.29	(0.23)	72.02	(0.35)	64.47	(0.36)	47.88	(0.45)

方法

【世帯年収別の内訳】

世帯年収	サンプル		母集団
	n	%	
100万円未満	22	1.8%	1.5%
100~200万円	35	2.8%	5.1%
200~300万円	64	5.1%	6.7%
300~400万円	117	9.4%	9.1%
400~500万円	153	12.3%	10.6%
500~600万円	186	14.9%	13.0%
600~700万円	158	12.7%	10.6%
700~800万円	143	11.5%	10.6%
800~1000万円	201	16.1%	15.7%
1000~1500万円	129	10.3%	13.0%
1500~2000万円	28	2.2%	2.7%
2000万円以上	11	0.9%	1.3%
合計	1247		

【子どもの性別・学年段階別の内訳】

学年	性別			合計
	男子	女子		
幼児	177	137		314
小学生低学年	108	103		211
小学生高学年	110	111		221
中学生	101	116		217
高校生以上	151	133		284
合計	647	600		1247

注: 母集団分布は平成26年国民生活基礎調査に基づく

方法

◆ 参加者

- Web調査サービスFastaskの調査モニター
- 3~18歳の子を持つ父親・母親1247名

【年齢段階別の内訳】

年齢	サンプル				母集団		
	父親		母親		合計	父親	母親
	n	%	n	%			
<24	0	0.0%	5	0.8%	5	0.3%	0.6%
25-29	17	2.7%	37	5.9%	54	3.1%	4.8%
30-34	66	10.6%	112	18.0%	178	12.3%	16.0%
35-39	143	22.9%	163	26.2%	306	23.3%	27.1%
40-44	204	32.7%	171	27.4%	375	29.9%	31.5%
45-49	128	20.5%	112	18.0%	240	20.2%	16.0%
50-54	43	6.9%	23	3.7%	66	7.7%	3.4%
55-	23	3.7%	0	0.0%	23	3.2%	0.5%
合計	624		623		1247		

注: 母集団分布は平成10年~平成25年の人口動態調査より算出

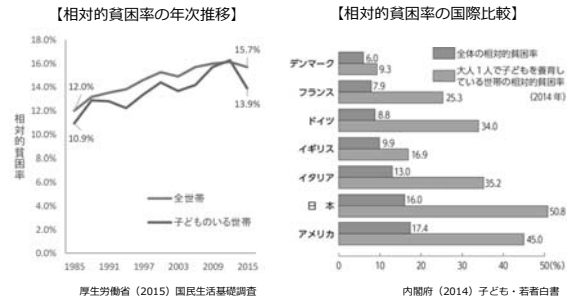
【地域別の内訳】

地域	サンプル		母集団
	n	%	
	北海道	54	
東北地方	77	6.2%	6.7%
関東地方	442	35.4%	33.8%
中部地方	220	17.6%	18.9%
近畿地方	224	18.0%	16.4%
中国地方	74	5.9%	5.8%
四国地方	29	2.3%	2.9%
九州地方	127	10.2%	11.6%
合計	1247		

注: 母集団分布は平成27年国勢調査に基づく

問題

◆ 社会経済的な格差の拡大



問題

◆ 国内の研究 (お茶の水女子大学, 2018)

	小6				中3			
	総正答率 (国語算数AB)		SES	総正答率 (国語数学AB)		SES		
	「非認知スキル」	「非認知スキル」		「非認知スキル」	「非認知スキル」			
総正答率 (国語算数AB)	1		1					
「非認知スキル」	0.27	1	0.20	1				
SES	0.38	0.15	1	0.39	0.10	1		

〔非認知スキルの項目〕

- ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある。
- 難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦している。
- 自分には、よいところがあると思う。
- 友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意だ。
- 友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができる。
- 友達と話し合うとき、友達のを受け止めて、自分の考えを持つことができる。
- 学級会などの話し合いの活動で、自分とは異なる意見や少数意見のよさを生かしたり、折り合いをつけたらして話し合い、意見をまとめている。
- 学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがある。

【確認的因子分析の結果】

直接指標	CFI=.907 RMSEA=.069		1因子			2因子			CFI=.921 RMSEA=.064
	F1	F1	F1	F2	F2				
1 世帯収入	.534	.636			50-2500				
2 世帯資産	.420	.473			125-25000				
3 学歴(夫婦平均)	.538	.581			9-21				
4 雇用形態(夫婦平均)	-.452	-.533			-2.31-1.72				
5 職業(夫婦平均)	-.462	-.527			-2.34-2.26				
間接指標 (NIMSES)									
1 保有する本の冊数		.569		.583	0-6				
2 保有するパソコンの台数		.428		.434	0-2				
3 読書時間(親)		.561		.581	0-6				
4 新聞を読む時間(親)		.495		.513	0-6				
5 読書時間(子ども)		.503		.521	0-6				
6 絵本などの読み聞かせ		.310		.315	0-5				
7 本を買い与える		.424		.439	0-5				
8 国内旅行(泊まり)		.502		.517	0-4				
9 海外旅行		.633		.649	0-3				
10 習い事: スイミング		.318		.326	0-1				
11 習い事: 楽器		.380		.415	0-1				
12 習い事: 英会話		.305		.312	0-1				
13 習い事: 通ったことがない		-.516		-.527	0-1				
14 習い事の合計時間		.425		.436	0-6				
因子間相関	F1		F2	.758					

【多母集団分析の結果】

地域	df	χ^2	CFI	RMSEA
個別:関東	149	525.5	880	076
個別:近畿・中部	149	476.7	914	067
個別:その他	149	418.5	882	077
配置不変	447	1406.3	896	073
測定不変	485	1183.2	924	059
親の性別				
個別:父親	149	524.7	901	064
個別:母親	149	645.7	893	074
配置不変	298	1170.5	897	069
測定不変	317	983.3	921	059
親の年齢				
個別:20-30代	149	674.7	925	088
個別:40-50代	149	523.7	907	057
配置不変	298	1286.0	919	071
測定不変	317	1021.5	937	060
子どもの性別				
個別:男子	149	613.1	897	070
個別:女子	149	578.5	906	070
配置不変	298	1189.9	902	070
測定不変	317	870.0	939	053
子どもの学年				
個別:幼児	149	555.6	917	094
個別:小学生	149	530.4	893	078
個別:中学生	149	439.8	905	063
配置不変	447	1533.0	907	077
測定不変	485	1213.2	938	061

【子の学年段階による得点差】

	M	SD
幼児	29.91	13.36
小中学生	38.40	14.24
高校生以上	35.69	15.34
全体	35.64	14.70

目的・方法

◆ 目的：SESと子どもの発達・心理社会的適応の関連を大規模コホート研究により検証

◆ 参加者

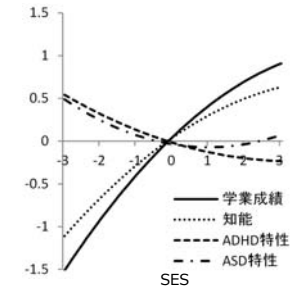
- ・ 年少から中3の9160名
 - ✓ 保護者：全学年
 - ✓ 担任教員：小中学生
 - ✓ 本人：小2～中3

【参加者の内訳】

	男子	女子	合計
年少	168	194	362
年中	219	185	404
年長	219	202	421
小1	486	457	943
小2	450	463	913
小3	455	423	878
小4	455	459	914
小5	453	468	921
小6	436	450	886
中1	439	417	856
中2	360	420	780
中3	481	401	882
合計	4621	4539	9160

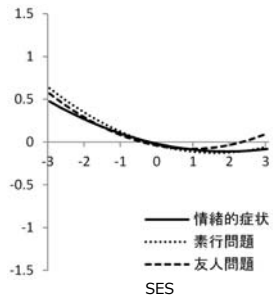
結果

◆ 知的発達・発達障害特性との関連



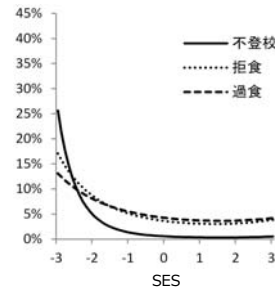
結果

◆ 情緒・行動問題との関連



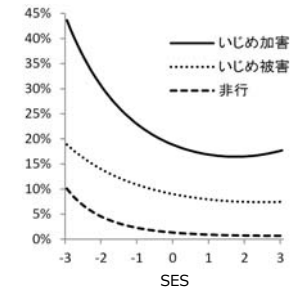
結果

◆ 内在化問題行動との関連



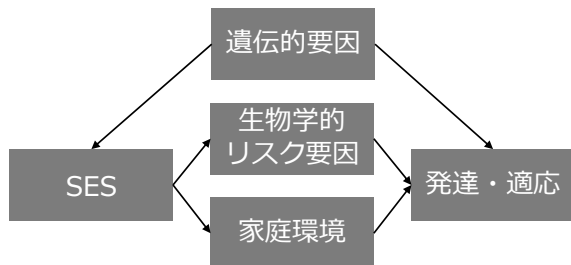
結果

◆ 外在化問題行動との関連



考察

◆ 考えられる因果的メカニズム



児童・青年の発達とメンタルヘルスに関する
大規模縦断研究

一般小中学生における情動調整方略と食行動異常の関連

村山 恭朗
神戸学院大学 心理学部

国内の傾向

- ・ 摂食障害の罹患率の上昇 (中井, 2010; 1982→2002)
- ・ 食行動異常を示す生徒の増加 (中井, 2010; 1982→2002)

全対象者	1982年	1992年	2002年	有意差
理想体重(9g)	47.3±0.4	46.8±0.4	46.3±0.5	n.s.
太り過ぎと思う(%)	60.0	63.0	69.1	Z=4.2, p<.001 1982年<2002年
やせ願望(%)	69.9	70.0	82.3	Z=11.3, p<.001 1982年<2002年
食事制限(%)	30.2	33.5	44.9	Z=12.9, p<.001 1982年<2002年
高度*の食事制限(%)	8.1	8.2	8.9	n.s.
むちゃ食い(%)	12.7	32.5	33.4	Z=23.3, p<.001 1982年<2002年
高度*のむちゃ食い(%)	1.2	3.8	4.7	Z=9.6, p<.001 1982年<2002年
浄化行動(%)	3.8	9.4	11.8	Z=14.0, p<.001 1982年<2002年
高度*の浄化行動(%)	0.4	0.8	1.0	Z=3.8, p<.001 1982年<2002年
無月経(%)	2.1	3.0	3.6	Z=4.3, p<.001 1982年<2002年

*3か月以上の間、少なくとも週2回以上

方法 Methods

・調査対象者

A県B市にあるすべての公立小中学校に通学する小学4年生から中学2年生 (n=4394)

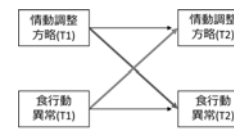
・調査実施年度

2015年度～2016年度

Table 1 対象者の内訳

学年	性別		合計	
	男子	女子		
小学	4年生	434	434	868
	5年生	450	414	864
	6年生	408	460	868
中学	1年生	489	415	904
	2年生	442	448	890
合計	2223	2171	4394	

結果①：交差遅延モデル

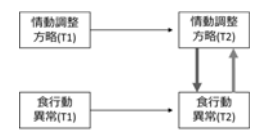


交差遅延モデルの結果

	やせ願望/体型不満		過食	
	情動調整方略(T1)→食行動異常(T2)	食行動異常(T1)→情動調整方略(T2)	情動調整方略(T1)→食行動異常(T2)	食行動異常(T1)→情動調整方略(T2)
問題解決	-.019	-.005	-.019	-.010
反すう	.042 **	.017	.055 ***	.000
気晴らし	.007	.022	.027	.016
統制変数→食行動異常				
性別	.128 ***	.001	-	-
学年	.060 ***	.048 ***	-	-
BMI	.059 ***	-.007	.026 *	.028 **
抑うつ症状	.038 *	.028	.044 **	-.022

性別：男子=0, 女子=1
*p<.05 **p<.01 ***p<.001

結果②：同時効果モデル



同時効果モデルの結果

	やせ願望/体型不満		過食	
	情動調整方略(T1)→食行動異常(T2)	食行動異常(T1)→情動調整方略(T2)	情動調整方略(T1)→食行動異常(T2)	食行動異常(T1)→情動調整方略(T2)
問題解決	-.037	-.008	-.021	-.027
反すう	.068 *	.022	.091 **	.011
気晴らし	.021	.053	.091 **	.011
統制変数→食行動異常				
性別	.126 ***	-.003	-	-
学年	.057 ***	.048 ***	-	-
BMI	.075 ***	-.008	.047	-.042
抑うつ症状	.055	.057	.041	-.048 **

性別：男子=0, 女子=1
*p<.05 **p<.01 ***p<.001



2019教育心理学

小中学生の自傷行為と内在化問題, 対人関係問題との関係

高柳 伸哉 (愛知東邦大学)

愛知東邦大学
ASHIYAMA UNIVERSITY
オンラインセンター

方法

参加者

中学校4校の中学校1～3年生とその保護者への質問紙調査。
調査実施年度2012～2018年のうち、中1～3年生まで3年間実施した5つの学年コホートのデータを用いた。

Table 1 参加者の性別・入学年度別 内訳

入学年度	性別			合計
	男子	女子	合計	
2012	390	367	757	
2013	424	396	820	
2014	420	429	849	
2015	460	391	851	
2016	357	416	773	
合計	2051	1999	4050	

中1から中3にかけて自傷行為の有効回答が得られたデータのみを使用。

有効回答率
4396名中 4050名 (92.13%)

結果

1) 自傷経験率

調査実施当時の対象者の学年ごとに、自傷行為3項目で1つでも「2.1回でもある」と回答した生徒を「自傷経験群」として分類。

- ・学年全体：男子 8.40%、女子 11.89%、合計 10.12%
- ・学年別では男女とも、中学1年生時がもっとも経験率が高い。

Table 2 参加者の性別・調査学年別の自傷経験率

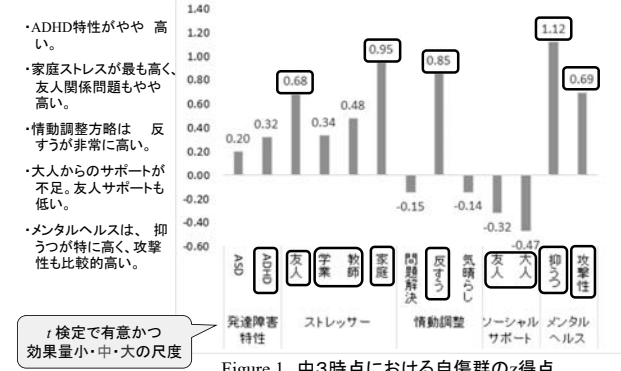
学年	性別						合計		
	男子			女子			なし	あり	%
中1	なし	1849	202 (9.85%)	1722	277 (13.86%)	3571	479	11.83%	
	あり	1876	175 (8.53%)	1759	240 (12.01%)	3635	415	10.25%	
	合計	1911	140 (6.83%)	1803	196 (9.80%)	3714	336	8.30%	
合計	5636	517 (8.40%)	5284	713 (11.89%)	10920	1230	10.12%		

① t検定：従属変数：各尺度得点、独立変数：自傷経験有無

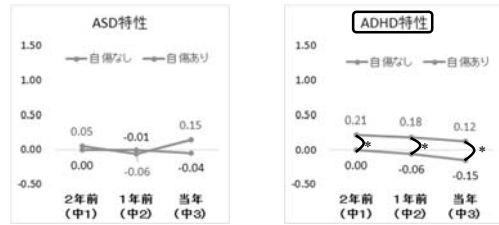
発達特性	尺度	学年	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	t値	効果量d
ASD傾向	中1	3107	12.79	(2.63)	103	12.92	(2.72)	-0.50	0.05	
	中2	3030	12.77	(2.62)	97	12.63	(2.42)	0.51	0.05	
	中3	3056	12.67	(2.52)	99	13.17	(2.82)	-1.74	0.20	
ADHD傾向	中1	3120	1.94	(2.94)	105	2.57	(3.46)	-2.15 *	0.21	
	中2	3025	1.77	(2.79)	98	2.48	(3.23)	-2.14 *	0.25	
	中3	3036	1.50	(2.47)	100	2.29	(3.12)	-2.51 **	0.32	
友人関係問題	中1	3223	1.91	(1.44)	108	2.38	(1.55)	-3.10 **	0.32	
	中2	3215	1.85	(1.42)	108	2.68	(1.85)	-4.57 ***	0.57	
	中3	3235	1.90	(1.44)	108	2.88	(1.85)	-5.46 ***	0.68	
学業ストレス	中1	3243	4.44	(1.95)	107	5.28	(3.28)	-4.28 ***	0.42	
	中2	3256	4.84	(2.02)	107	5.36	(1.85)	-2.59 **	0.25	
	中3	3261	4.10	(2.25)	108	4.86	(2.19)	-3.47 ***	0.34	
教師ストレス	中1	3236	0.68	(1.30)	106	0.82	(1.25)	-1.10	0.11	
	中2	3247	1.00	(1.61)	108	1.42	(1.72)	-2.67 **	0.26	
	中3	3250	0.80	(1.34)	108	1.44	(1.91)	-3.49 ***	0.47	
家庭ストレス	中1	3249	1.41	(1.58)	108	2.11	(1.97)	-3.67 ***	0.44	
	中2	3251	1.52	(1.70)	108	2.49	(1.88)	-5.30 ***	0.57	
	中3	3260	1.68	(1.74)	108	3.32	(1.99)	-8.51 ***	0.94	

尺度	学年	度数	平均値	標準偏差	度数	平均値	標準偏差	t値	効果量d
問題解決	中1	3248	9.79	(3.05)	108	9.56	(2.71)	0.80	0.08
	中2	3249	10.20	(3.13)	108	9.59	(3.25)	1.97 *	0.19
	中3	3236	10.43	(3.06)	108	9.98	(3.21)	1.49	0.15
反すう	中1	3262	9.03	(3.01)	107	10.24	(2.84)	-4.11 ***	0.40
	中2	3260	9.21	(3.14)	108	10.43	(2.86)	-3.96 ***	0.39
	中3	3261	9.12	(3.13)	108	11.80	(3.07)	-8.74 ***	0.85
気晴らし	中1	3259	7.04	(2.37)	108	7.14	(2.25)	-0.44	0.04
	中2	3256	7.09	(2.42)	108	6.74	(2.27)	1.48	0.14
	中3	3260	6.93	(2.28)	108	6.60	(2.55)	1.45	0.14
友人サポート	中1	3263	9.62	(2.01)	108	9.49	(2.16)	0.67	0.07
	中2	3266	9.68	(1.96)	108	9.25	(2.05)	2.24 *	0.22
	中3	3264	9.70	(1.93)	108	9.08	(1.97)	3.26 **	0.32
大人サポート	中1	3263	9.47	(2.20)	108	8.97	(2.28)	2.31 *	0.23
	中2	3265	9.10	(2.28)	108	8.36	(2.04)	3.32 ***	0.32
	中3	3267	9.12	(2.25)	107	8.07	(2.26)	4.78 ***	0.47
抑うつ	中1	3228	4.07	(2.79)	106	4.87	(2.94)	-2.91 **	0.29
	中2	3228	4.34	(2.85)	107	5.89	(3.23)	-4.89 ***	0.54
	中3	3244	4.52	(2.90)	105	7.78	(3.36)	-9.82 ***	1.12
攻撃性	中1	3197	15.56	(4.90)	104	17.42	(5.63)	-3.35 **	0.38
	中2	3217	15.21	(4.68)	107	17.03	(4.81)	-3.96 ***	0.39
	中3	3226	14.61	(4.52)	106	17.75	(4.98)	-7.01 ***	0.69

② 中3自傷行為発生時のリスク要因(対照群を基準にz得点化)：



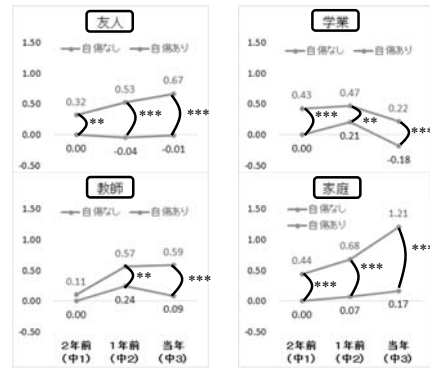
③3年時の自傷行為発生における各群・各要因の軌跡の比較
(中1時点の対照群を基準としてz得点化): 発達特性(ASD・ADHD)



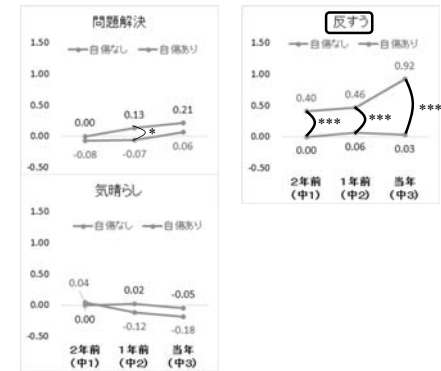
有意水準 t 検定における効果量Cohen's d

- * $p < .05$) 効果量小 $0.2 \leq d < 0.5$
- ** $p < .01$) 効果量中 $0.5 \leq d < 0.8$
- *** $p < .001$) 効果量大 $0.8 \leq d$

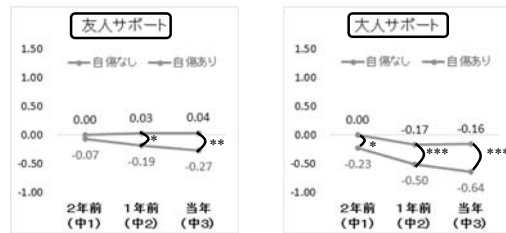
社会的不適応(ストレス)



情動調整方略



ソーシャル・サポート



メンタルヘルス

